

■□ 第2分科会

「物」の整理を通して考える ～暮らしの安全・安心と生協の役割



川口 啓子 (大阪健康福祉短期大学教授)

■報告者とファシリテータ

解題：川口啓子 暮らしの安全・安心と生協の役割を考える

報告Ⅰ：横尾将臣 孤立死の現場に残された「物」から

報告Ⅱ：西山尚幸 自治体がすべきこと・私たちにできること

「物」の整理研究会：右近裕子、岡田温美、奥谷和隆

※後半のグループワークでは、報告者及び「物」の整理研究会メンバーがファシリテータを務め、自己紹介、名刺交換も行ない、交流を深めました。

解題

第二分科会では、「物」をキーワードに、暮らしの安全・安心を考えたいと思います。皆さまの家には、どれほどの「物」があるのでしょうか。「物」は、私たちの暮らしをどのように彩っているのでしょうか。

一方、押し入れ、天袋、納戸、吊戸棚、引き出しなどを覗くと、どれほど使わない「物」があるでしょう。昔の眼鏡や財布、景品のキーホルダー、電池の切れた時計、内祝いのコーヒーカップ、香典返しのタオルやお茶、旅行のお土産…。これらの「物」のうち、常に意識下にある「物」は計画的に使うかもしれませんが、意識しない「物」は死蔵品になるばかりです。

「まだ使えるから」「定年になったら片づける」とは言うものの、加齢とともに「物」は増え、体力・気力は衰えます。何より、その「物」を使わなくても可能な生活を今まさに続けていますから、多くの「物」の存在は、結局、忘れ去られてしまいます。

こうした暮らし方と「物」の背景には、

今日の社会の在りようや生活習慣などが大きく作用しています。社会の進化が速すぎて使う機会をなくし、「まだ使えるから」を不可能にします。年とともに「片づける」という実践そのものを困難にし、高齢者が抱える「物」は、やがて遺品という名の廃棄物になる運命にあります。

処分に出した「物」も地球自然の許容範囲を超え、グローバルな環境汚染を招き始めました。先進国が生み出したプラスチック廃棄物は、途上国から突き返されるようになっています。

「断捨離」や「ミニマリスト」という言葉が流行り、ともすると「物」は邪魔者扱いされますが、暮らしと「物」との関係は、単に不要な「物」を処分してスッキリすればよいという問題ではなさそうです。

私たちが暮らす資本主義社会は、莫大な生産力を築く過程で「物」を豊かさの象徴にしてきました。「物」があれば、一生何とか暮らせるだろう、と。

ところが今、いくら「物」があっても暮

らしが成り立たない現実に出会うようになりました。大きな社会格差が生み出された今日、「物」であふれた住まいがゴミ屋敷と化し、社会的孤立の象徴にもなっているのです。

そして、孤独死。その背景には、非正規雇用、単身世帯の増加、若者の孤立、子どもの貧困、無縁社会・・・が広がり、徐々に暮らしの安全・安心が蝕まれているように思えてなりません。

こうした現状をどのように考えればいいでしょうか。生協には何ができるでしょうか。暮らしの安全・安心の担い手として求められる生協の役割を考えてみたいと思います。

■報告 I

「孤立死の現場に残された「物」から」—
横尾将臣(株式会社メモリーズ代表取締役)



私は、家の片づけの仕事をしています。おそらく、日本でもかなり多くの孤独死・孤立死(注1)の現場に遭遇し、修羅場もくぐってきました。昔はラグビー、今はミュージシャンとしてサクソを吹き、施設でボランティア活動もしています。本日は、朝早くからどんより暗い話になりますので、話し終わった後に2~3曲演奏した

い気分です。

さて、片づけは誰にでもできる仕事のように思いますが、今日、片づけられない高齢者の方、空き家問題、人々の孤立といった問題に多々直面します。そういう意味で、私たちの取り組みや発信は、非常に大事だと感じます。

昨年4月からNHK番組「プロフェッショナル」の取材を受け、7月に放送されました。40日もの間、ディレクター、カメラ、音声の方たちが大阪に張り付いて取材されました。NHKの放送後、全国からたくさんの相談やメッセージをいただき、片づけられないことで悩んでおられる方の多さにあらためて気づくことができました。

私がこの仕事を始めたきっかけは、祖母の突然死です。当時、葬儀から遺品整理までひとりでこなしていた母が身体を壊してしまいました。そのとき、子どもが昔に描いた絵や成績表などが捨てられない様子や、兄弟姉妹が手を止めて思い出話に花を咲かせる様子を見て、家族の意向や思いに向き合いながら家の片づけをする仕事が世のなかに必要だと思い、この世界に入ったのです。

遺品整理という、最初にご家族の方と一緒に「こんなお写真が出てきましたよ」などと進めていくのかと思っていました。が、とんでもない。ホコリまみれの3K業務、なかなか大変な仕事です。孤独死された方のお部屋を清掃する場合、警察がご遺体を持って行った後に床に残った皮膚片をデッキブラシでこすったりします。臭いもきつく、10秒もその部屋にいたら電車に乗れないほど強烈です。

一方、ある依頼者は、突然、警察から「親が死んだ」との連絡があり、住居の管理人からは「きれいに清掃して返してください、臭いがあつたらだめです」と言われ

たと…。いきなりそう言われ、近所迷惑かと気になって、親が亡くなった悲しみに向き合えないでおられました。そうした状況のなか、貴重品をわけ、写真は残し、誠意をもって片づけました。そのときの娘さんの「ありがとう」は、人生のなかでも最も貴重な、何とも言いがたい「ありがとう」でした。本当に感謝されました。それから人生をかけてこの仕事をやろうと誓い、今日に至っています。

孤独死の場合、多くの人が「まさか、うちの母が」「父が」となります。「感謝の言葉を伝えたかった」という心残りや、「親を腐らせてしまった」というような後悔と自責の念で、親が亡くなったという悲しみに向き合えないのです。

私たちの仕事の多くは、親が亡くなられた後の遺品整理ですが、ときに子どもを亡くされた現場に何う場合もあります。

あるときロープをかけて亡くなった子どもさんの、血の跡が残る現場にいきました。見積もりのとき、悲しむご両親に何か言葉をかけたいのだけど、その言葉で傷つけたらどうしようと、何も言えませんでした。このとき、「悲しみから立ち直れない人に対してどう寄り添うか」という大きなテーマに対峙しながら、グリーンケア（注2）を学びました。

また、家族関係の困難が窺える事態にも出会います。

先日、「親の住まいがゴミ屋敷になって、周りから迷惑だから出て行ってほしいと言われていて。何とか片づけたい」と、長女の方から相談を受けました。ですが、親御さん本人は「絶対に嫌だ」と言います。そこで、デイサービスに行っている間に一気に駆け込んで片づけることにしました。ところが、忘れ物をしたと戻ってこられ、片づけがストップしてしまいました。やはり、

本人が嫌だと言っている以上は動きません。そのとき長女は、「今度会うのは、お前の葬儀のときじゃ〜！」と言い放ちました。

写真1は、熱中症で孤独死されたおばあさんの家です。畳が腐って床が抜け落ちて、家具が倒れかかっているような家で暮らしていました。発見されたときは、すでに死後2週間ほど。おそらく餓死でした。しかし、娘である依頼主は現場に来ず、委任状などのやり取りと電話だけです。最後に理由を聞いたところ、「虐待を受けていた。この家に向かおうとすると足が震えて行けない」とのこと…。



写真1 高齢者の孤独死

写真2は、極端に本が多い家でした。見積もりに行くと、居室からガレージのなかまで全て本です。このような現場は体力が要りますが、全てが資源なので処分代はそれほどかかりません。ただ、地震や火事が



写真2 異常に本が多い家

起きた場合にはとても危ない状態ではあり
ました。

昨日行った現場は、おそらく寝ていると
きの異変で、助けを求めることができずに
倒れて亡くなった方の現場でした。遺体は
溶けていました。畳を外しても、隅には肉
片が残り、頭があたっていたサッシには髪
の毛がこびりついていました。

孤独死が近隣に与える影響も無視できま
せん。

ある文化住宅で、夜中にポツンポツンと
音がするので電気をつけたら、天井から蛆
が落ちてきていました。上の階で人が亡く
なっていたのです。

蛆が出るのは、夏なら死後5日から10
日、さなぎで死後10日、蠅がたかっている
と2、3週間、蠅が死んでいたら4週間
以上というところでは。浴槽の表面を蛆が
泳ぎ回っていることもあります。水を抜く
と配管が詰まるので、何回も濾してきれい
にして、資産価値が少しでも低下しないよ
うにします。このような現場の原状回復は、
特殊な清掃や消毒が必要となり、相当高く
ついてしまいます。

孤独死のうち、家族が気づくのは1割も
ありません。ほとんど近隣です。「何か臭う」
「最近見かけない」という状況から、警察
を呼ぶと亡くなっていた。しかし、その人
が部屋に住んでいた本人とわかるまで部屋
には入れません。DNA鑑定になるとさら
に日数がかかります。その間、近隣は死臭
が漂うなかで生活しなければなりません。

孤独死と孤立死の定義は確立してない
ようですが、社会的孤立が招いた死を孤立
死と言っていいと思います。孤立死はセルフ
ネグレクト（自己放任）が8割と言われ
ます。逆に言えば、地域と、誰かとつなが
っていれば、セルフネグレクトに至らず、孤
立死にも至らなかつたのではないかという

ことです。つながるということは、本当に
大切だと思います。

こんな事例もあります。おしっこがジッ
プロックに入っています。トイレは詰まっ
て山盛りになっていて、私たちはスコップ
でそれを片づけます。場合によっては玄関
を開けたら遺体が転がってきたなどとい
うこともありました。

26匹のポメラニアンを飼っていた方は、
死後1か月で発見されました。糞尿だらけ
の家で、1匹だけ生きていました。遺体を
食べていたのです。口が真っ赤で、すごい
形相です。あのかわいいポメラニアンがこ
んなふうになるかと…。

住んでいる方が行方不明になって、搜索
願を出していたが見つからず、最終的に私
たちが家財道具を片づけたら、「物」の下
から変わり果てた姿で見つかったこともあ
りました。すると、故人のお母さんは、「あ
あよかった」と。その一言に、そうだなあ、
と思いました。自宅で、故人の好きな品々
に囲まれて最期を迎えることができたので
すから。

また、ダイイングメッセージを見ること
もあります。多くの場合、部屋のなかには
SOSがあふれています。

冷蔵庫に、「明日もまた生きてやるぞと
米を研ぐ」とメモがあります（写真3）。



写真3 ダイイングメッセージ

故人は、近隣ではあいさつもなく、放っておかれた人でした。発見時、死後半年も経っていましたが、必死で生きようとしていたのです。

コミュニティのないワンルームマンションで、ひっそりと暮らしていた方もいました。「これからの私の人生、過去のよいことも悪いことも忘れる、今日一日を大事にして生きる、毎日公園で散歩する」など前向きな姿勢がメモに残されています。コミュニティのつながりのあるところなら、孤立死は免れたように思います。

ある50代女性の残したメモには、「私は何もできなくなりました。毎日がつらいです。死んでもいいと思っています。でもなかなか踏ん切りがつかません。体は垢だらけ、1か月は風呂にも入っていません」と書いてありました。その横には、履歴書がありました。社会復帰をめざそうとしていたのです。孤独や不安と戦って生きようとしていたのです。

人は、何かのきっかけで普段のリズムが狂っていきます。「明日やればいい」「3日くらい風呂に入らなくても」とか…。

そして、徐々に近隣との接点がなくなり、家族の縁も希薄になり、家が荒み、加速度的に孤立していきます。この時間経過のどこかで誰かつながっていれば、リカバリーできたかもしれません。

どの人も葛藤していました。自分はなぜこんなことをしているのか、これではいけないと。でも、人は弱いものです。

「孤独死をなくそう」— 私もかつてはそう言っていました。しかし、孤独死をなくすというのは、「最期まで自宅にいたい」という高齢者の想いが奪われるような、かなりつらい言葉です。ですから、「孤独死をなくす」のではなく、「孤立をなくす」ことが先なのではないか、と思うようにな

りました。

たとえ、ひとりで亡くなくても、「ちゃんと見ているよ、何があっても発見してあげるよ」という安心感、それができる地域であってほしいのです。ひとりで亡くなったとしても、住み慣れた自宅で最期を迎えるのは、決して間違いではありません。「孤独死＝他人様に迷惑」と思わせる地域や社会のほう間違っているのではないのでしょうか。

死後3日間以内に発見すれば、簡単な消毒で済みます。そこで、私は今「プロジェクト72」を掲げ、「孤独死はなくせない、孤立をなくそう」と各地で話をしています。死後3日以内の発見は、孤立が減ったことの証、成功例です。

気兼ねなくSOSを発することができる社会、SOSにすぐに気づく社会でありたいと思います。

注

- 1) 孤独死、孤立死の定義は未確立である。死後何日を以て孤独死とするかによってもその数は異なる。正確な数は不明だが、全国で約3万人が孤独死であると言われる。
- 2) 身近な人を亡くした悲しみにある人をサポートするケアをグリーフケアという。一方的な励ましではなく、悲嘆に暮れるという状態に寄り添い、回復への支援を行う。

■報告Ⅱ「自治体がすべきこと・私たちにできること」— 西山尚幸(コンシューマーズ京都事務局長)



NPO 法人・コンシューマーズ京都は、その前身の活動から数十年を経ました。時代とともに変化する消費者意識において、昨今は「親の遺品整理が大変だった」という声を聴くようになりました。そこで、「2R（注3）で老いる前の物の整理を」というシンポジウムを開催し、研究会を立ち上げ、このたび『老いる前の整理はじめます！暮らしと「物」のリアルフォトブック』（クリエイツかもがわ）の出版に至りました。

こうした研究を通じて、「ゴミ出しにも社会的支援が必要」というケースを深く知ることとなりました。

2015年に国立環境研究所が全国約1700の自治体を対象に行った調査によると、高齢者向けのゴミ出し支援を行っている自治体が約22%ありました。

横浜市「ふれあい収集」では、ゴミを集積場まで持って行くことができない高齢者の場合、敷地や玄関先から市職員が直接ゴミを回収し、収集日にゴミが出ていない場合には、安否確認を行っています。横浜市の直営で、市職員が直接その業務を行っています。対象は、家族や近所の協力が困難で、自ら集積場にゴミを持ち出すことができないひとり暮らしの人、同居者がいても、身体障害者手帳を交付されている方、要介護認定を受けている方などです。

福岡県大木町では、「高齢者等ゴミ出しサポート事業」をシルバー人材センターに委託しています。週1回から月1回、シルバー人材センターのスタッフが、ステーションにゴミを持って行けない方を訪問し、ゴミの整理や新聞を束ねたりします。ただ、ゴミの分別は各自ですることになっていますので、認知症の方はゴミの分別ができません。いくら自治体がゴミ出し支援をしても、分別できていないゴミは回収してもらえないのです。結果、ゴミを家に戻

してしまいますので、必然的にゴミ屋敷が生まれてしまいます。数年後に増える認知症高齢者のことを考えると、大きな懸念が残ります。

千葉市では、町内会や老人クラブなどの団体がゴミ出し支援をする場合、「高齢者等ゴミ出し支援事業補助金」として、費用が補助されます。ここでも、障害者手帳を持っている人などが対象です。

自治体のゴミ出し支援をしているうちの7割ほどは、障害者手帳や要介護認定を受けている人を対象としています。そうでない事例は、3割にとどまります。地方に行けば地域コミュニティがまだ残っているため、逆に自治体でのサービスは行われません。財政基盤が弱いという問題もあるでしょう。

熊本県水俣市には、〈ゴミ分別ごめんなさいシール〉の取り組みがあります。認知症などで分別ができない場合、分別せずに出していいという制度です。指定のゴミ袋に指定の〈ゴミ分別ごめんなさいシール〉を貼って出せば、回収した後、市のクリーンセンターで分別してくれる制度です。ようやく、家庭ゴミの分別まで行政が対応する事例がでてきました。

京都市では、2014年からゴミ屋敷対策として「不良な生活環境を解消するための支援及び措置に関する条例」を施行しました。▽要支援者が抱える生活上の諸課題の解決▽市民の安心かつ安全で快適な生活環境の確保▽市民が相互に支え合う地域社会の構築——を目的としています。ゴミ屋敷は、他都市の多くは行政のゴミ部局が中心に取り組みますが、京都市は福祉部局（健康福祉局）が取り組んでいます。孤立死の8割はセルフネグレクトであろうという認識のもと、福祉部局が「寄り添い」と「支援」の視点で実施しているのです。

手順としては、地域住民からの通報や福祉事務所や消防職員などが地域巡回時にゴミ屋敷を発見すると、市の担当者やケアマネが同行調査をし、対応方針を協議、判定・決定します。ここで大切なのは、「寄り添い」と「支援」です。要支援者が納得して、「自分で整理し、掃除を行い、ゴミを出す」ことが基本になります。本人だけでできない場合は市の担当者も手伝います。信頼関係を築きながらの作業で、すぐに話がつくことはありません。数か月かかるケースもあれば、調査自体の拒否もあり、なかなか進展しない現状です。

制度開始の2014年当時、京都市内で108軒のゴミ屋敷があり、うち屋内ゴミ屋敷が60%、残り40%が庭先までゴミが出ており、さらにその半分が敷地外の道路にまであふれている状況でした。複数の人が住んでいた世帯は30軒でしたが、自分の家がゴミ屋敷であることを無視しているという状況でした。最終的には「処置命令」「戒告通知」「行政代執行」の手続きをします。最初の指導から行政代執行まで、説得を続けながら約3ヶ月かかりました。

東京都足立区では「生活環境の保全に関する条例」を制定しています。事案ごとに生活環境保全審議会を開催し、行政代執行が正しいかどうかを審議しています。また、町内会など、地域の団体に協力と連携を求めるのが特徴です。

高齢世帯、しかも単身世帯が増加している今、ゴミ出し支援制度を持つ自治体は2割に過ぎず、中小規模の自治体では手が回りません。地方では多世代同居や近隣住民の助け合いもあり、そもそもゴミ出し支援の必要があるとも思っていません。ですが、地方の単身高齢者世帯は明らかに増えており、これから大きな問題になるでしょう。いずれにせよ、公助 — 行政に期待するこ

とには限界がありそうです。

では、共助はどうでしょうか。

現代の高齢者は、「もったいない」が染みついている世代です。加えて、高度経済成長を経て、「物」を持つことがステータスでもありました。だから、捨てられません。そういう年代層の特徴を認識する必要があります。

たとえば、高齢者どうして見守りを行ったところ、たくさんの「物」で生活に支障が出て、「もったいないよね」ということになってしまいがちです。「物」を整理する活動にはなかなかつながりません。そのうち、ためこみ症候群やセルフネグレクトが生まれても、共助・互助ではその状況に対応できないのです。つまり、都市部とか郊外とか田舎とかに関係なく、ゴミ屋敷の背景には、地域コミュニティが適切に機能しない状況があるのが実情です。

では事業としてはどうでしょうか。

ダスキン「メリーメイド事業」では、1時間5000円以上です。全国で754店舗、47都道府県に店舗を持ち、昨年度売上高は109億1000万円。100億規模の市場なのです。ダスキン中期計画では高齢者向けの事業や役務提供サービス事業（注4）を、注力事業と位置づけ、人材確保対策として、女性・元気高齢者・外国人労働者を活用しています。

一方、生協の取り組みは、基本的に有償ボランティアです。京都生協では、「くらしの助け合いの会」が、買い物や掃除、洗濯などを行っています。活動会員ひとりにつき1時間900円、2人で1800円です。ダスキンと比べるとかなり安い感覚です。昨年は、ゴミ出しだけでなく、全活動を通じて535件、1万7901時間の活動をしました。医療福祉生協では、「乙訓医療生協支え合いの会」が、30分400円。年間1000単位、

500時間以上の活動をしています。

しかし、こうした生協の取り組みは、基本が有償ボランティア活動です。それだけでいいのでしょうか。限界を感じてはいませんか。すでに、組合員の平均年齢も57.3歳となり（注4）、今後も高齢化の傾向は広がるでしょう。このまま活動会員の確保ができるのか、分別や片づけはできても早朝のゴミ出し支援に行けるのか。そもそも、有償ボランティアを越えたコミュニティ再生事業には取り組めないのでしょうか。

孤独死、孤立死、貧困、家族や地域コミュニティの機能低下・崩壊…。

生協は今、暮らしの安全・安心にどう取り組むのか、その事業と運動の新たな枠組みが求められているといえましょう。

注

- 3) 2Rとは、Reduce、Reuseのこと。Recycleを合わせて3Rという。
- 4) タスキンは、①プロのおそうじ、②家事の代行、③害虫駆除、④花と緑のお手入れの4つを役割提供サービスとして事業化している。
- 5) 2018年度全国生協組合員意識調査報告書による。

■質問1 小浜美保子（コープあいち組合員理事）

私は自治体から役を引き受けていて、3年間に5人の孤独死に立ち会いました。そのうちのひとり（女性）ですが、78歳で亡くられました。

地域になじもうとせず、高齢者サロンに誘っても「どうせ自分をそういう目で見て」「わしにかまうな、放っといてくれ」と言われます。

ある日、近隣から「新聞が1週間たまっています、大丈夫でしょうか」という連絡がありました。それからご遺体の発見まで、1ヶ月を要しました。

女性は、生活保護を受けるようになってからほとんど近所づきあいがありませんで

したが、時折、旅行に行くとも聞き、安否確認の初日はいったん引き上げ、その後3日間、様子を見に行きました。それでも心配がなく市の福祉課に連絡したところ、「事件性や臭いなど、どう見てもおかしいという状態でなければ対応できない」と、さらに1週間様子を見ることになりました。

その後も朝晩に訪問し、やはり心配がなく、市職員と一緒に警察に行きました。すると、「死んでいるのは確かか」「部屋が荒らされている様子はない」など事件性がないことを指摘され、「ガラスを割らないと入れない、後でガラス代を請求されたら負担してくれるか」とまで言われました。結局、また4～5日様子を見ることになりました。

その後、1か月近くも音沙汰がないのはおかしいとなって、警察が鍵のプロを呼んでなかに入ったところ、布団のなかで亡くなっておられました。

この女性の場合、引き取り手がなく経費も出ませんが、地域の一員として何ができるのか、どのようにかかわればいいのか、アドバイスをいただければと思います。

【横尾】 まず、費用のことでは、一軒家の場合、競売費用から出すことは可能です。抵当に入っている場合など、一般的には管財人が入って処理します。生活保護の場合、賃貸の引っ越しでしたら3社の見積もりから国が一番低額な費用を負担しますが、亡くなってしまったら何も出ません。その場合、ほとんど大家さんの負担になります。

警察の対応は、地域によってかなりばらつきがあります。九州ならすぐ鍵屋が来て、身元がわからない場合は、警察が対応します。大阪はすぐガラスを割って入るので、私もガラスを片づけることがよくあります。ガラスの費用は原則として家族負担

です。

ご質問者の地域では、早く気づき、動き、福祉課にも行き、地域でできることをされていると思います。そこまでを早くできていることが大切なのです。そこまでをきちんとされているにもかかわらず、そこから先の対応が後手に回っていることに驚かされます。

■質問2 高橋剛太(コープしが代表理事・専務理事)

京都市でゴミ屋敷が100軒以上とのことですが、外にも道路にもあふれていない、臭いもしない、でもガラス越しに見たらゴミ屋敷という家の場合、それも行政の支援対象になるでしょうか。

というのも、我が家も「物」のない時代に生きてきた母は何も捨てられず、大変な戦いになりました。東京から姉も来て、説得して片づけましたが、とても大変でした。このように「私はこれでいい」「迷惑をかけていなければいいじゃないか」という場合の対処を教えてください。

【西山】京都市の条例は、「その方が健全な生活ができるかできないか」が基準になります。室内ゴミ屋敷は、京都市内各小学校区に2軒はあるだろうと想定されています。その地域の女性会や民生委員が訪問して説得し、それでも埒が明かなければ京都市に通報し、手続きに則って処分します。こういうとき、地域の動きは「あの人、出てこなくなったね」「何か臭いがするね」といった気づきから始まります。訪問すると、たいてい玄関先でシャットアウトされますが、まず玄関先で話を聞き、2か月かけて家に上がれるようになり、少しずつ「これはもう(処分しても)いいですね」と「物」を持ち出します。3か月かけて、やっ

と玄関から一番奥の居間まで歩ける通路を確保したという話を聞きました。半年後には居間まで片づけられたと。それでも2階には上がれないようですが、本当に地域の我慢強い取り組みのたまものです。

このような場合、当然、ご家族との対話も大切ですが、親はなかなか子どもの言うことを聞きません。もうひとつ、「主人の実家が…」という話もよく聞きますが、「無理に説得するのはあきらめてください」と言います。嫁姑戦争になる場合もあります。家族の場合、どうしても互いの言い分を押し付けて、「勝手にしろ、もう知らん」となりがちです。家族の説得よりも、第三者が入って少しずつ話をするほうが、比較的早く解決できるかと思います。

【横尾】「捨てる」という言葉を使わないことも大切です。私たちは「欲しい人がいるからあげていいですか」と言います。高齢者の場合、家を片づけるという行為は「最期の準備をさせるのか」ととらえる方が多いです。そうではなくて、「住環境をきれいに整えて長生きしてほしい」というメッセージをきちんと示す必要があります。まずは、「捨てる」と言わないことです。

そして、最も片づきたい場所からは片づけないことです。少し離れた、ふだん見ない押し入れの「物」や昔の布団など、確実に処分してもいい「物」をいくつか示して、「最近使っていないし、誰かにあげてもいいですか」とOKをもらいます。このOKの積み重ねが大事です。

また、あえて残しそうな「物」をピックアップして、「これは残しますよ」と、残す「物」と意思を示します。残す「物」は離れた部屋にとっておいて、徐々に片づきたい場所に近づきます。こうして信頼関係を築きながら、残す「物」はちゃんと残し

て、「これは欲しい人にあげましょう」と。すると意外にうまくいきます。きれいに片づいたときには、「長生きしてくださいね」というメッセージを添えてお花を贈ったりもします。

言うのは簡単ですが、その人、その人に合った方法を考えなければなりません。現場ではうまくいかないこともあります。たとえ100点ではないにしても、この方法が比較的なじみやすいのではないかと思います。

■質問3 濱田薫（おおさかパルコープ理事）

足立区や京都市のゴミ屋敷対策事例は、自治会に入っている方だから対応できるのではないのでしょうか。大阪は自治会に入っていない方も多く、そういう方はたいてい老人クラブにも入っていません。どこの名簿にも載っていない状態です。そういう方にも、何らかのかかわりが持てるのか、どうかかわり方があるのか、教えてください。

【西山】京都市の場合は、様子がおかしい家があれば、住民から行政に通報してよいことになっています。

最初に行政の福祉担当者やゴミ担当者が訪ねて話し合いをしますが、その際、できるだけ地域の方にも参加してもらおうようにします。自治会の加入とは直接関係ありませんが、自治会に入っていない方が増えているのは確かです。

また、ゴミ屋敷になっている方の8割くらいは何らかの精神的疾患を有している場合が多く、地域とのかかわりは疎遠になりがちです。疎遠があたりまえという前提でかわらなければならぬと思います。

【奥谷】地域の民生委員は、必ず高齢者のリストを持って見まわります。地域包括支援センターも対象の家を把握していますし、消防署も危ないと思われる人のリストを持っています。ですから、地域の自治会だけが様子を見ているのではなく、いろいろな見守りの目があるのです。ただ、それぞれがうまく連携できるかどうか、これからの課題です。

【川口】社協も小学校区別に65歳以上の家は全部つかんでいます。これからは、地域単位でそれぞれの組織や役割の方々がどういつながりをつくるかになります。地縁血縁に依拠したつながりが無くなった今、個々の暮らしを大切にしながらも、緩やかにつながる仕組みをつくっていかれると思います。

また、孤独死や孤立ではなくても、「物」が管理しきれずに家が荒んでくると、健康な人でも気持ちが滅入ります。時には、精神疾患を招いたり、孤独死につながったりもします。先ほど、横尾さんが、「孤独死をなくすのではなく孤立を減らしていく」と話されましたが、すべてを一挙に変えることはできません。身近なところから「物」と暮らし方と人のつながりを考えたいと思います。

■グループワーク

「暮らしの安全・安心と生協の役割」をテーマにグループワークをしました。以下、各グループの報告です。

■Aグループ 門脇文隆（生活協同組合しまね事業運営部統括部長）

「整理整頓は、『物』の片づけだけではなく、心の整理にもつながるのではないかと」「若いころは『物』の管理ができていたが、

家も広く『物』も増えて、大変になってきた」「できないことがつらい」「認知症になると分別が難しい」などの声が、多く聞かれました。

また、孤立を防ぐ重要性にも議論が及び、医療生協では週1回の「お元気ですか訪問」という全戸訪問の活動も紹介されました。

私は、共同購入事業を担当しています。週1回の配達では「72時間以内に発見できれば」というのは難しいのですが、夕食宅配の場合はほぼ毎日です。ひとり暮らしの方が多く、利用者も増えています。そうした利用者とのつながりにも力を入れなければならないと感じました。

一方、生協しまねの有償ボランティア活動「お互いさま」では、活動内容に制限がある上、働く女性が増えて担い手が減り、だんだんと活動が難しくなっています。

ある地域生協では、試験的に地域ごとに「暮らしサポート担当」の職員1名を配置し、配達担当者が組合員から受けた「困りごと」をつないで、行政への働きかけをするという試みをしているそうです。が、まだ試験的な段階であることと、そこからは利益が生まれないため、全エリアには配置できないそうです。直接的には利益を生み出さなくても、喜ばれる声を紹介することで活動の意義づけができればいい、という意見も出されました。

■ Bグループ 溝内啓介（コンシューマーズ京都）

私たちのグループも「自分の家でもこうだよ」「『物』が整理されず鼠が出た」などの話が出て、快適で健康的な生活のために、「食」と同じくらい住環境も大切だという話になりました。

そうした困った事態には、高齢者が「物」を捨てられない世代であることや周りのサ

ポートが必要なケースもあって、結局、「見られたくない」「干渉してくれるな」となることが多いようです。

このグループのメンバーから、東京在住の姉が実家近くのマンションに住んだ時の実体験を伺いました。きれい好きで整理されたスマートな暮らしをしている姉と、まったく逆の母の同居は、親子とはいえ大変なことになったそうです。「なんでそんなものを取っておくのか」という話から最初はけんかになったそうですが、やり取りしていくうちにわかりあえてきたとのこと。そのプロセスにもヒントがあると感じました。「自分も、心を母の立場に置いて、もう少し関心を持たないと…」と言われていました。

生協に何ができるかという点では、たとえば、注文書を見ると必要以上に記入しているなど、配達業務をしながら「大丈夫かな」と思うことがあってもなかなかフォローできません。見守り協定を結んでも、先週の商品が置きっぱなしになっているという程度の見守りしかできないのです。たとえば、特別なコースを作って、注文書を一緒に書くなど、フォローの必要な方に対応したいという夢を語られた方もいました。実際には、事業として実施するのはなかなか難しいようですが…。

神奈川の福祉クラブ生協では、こうしたフォローが必要な方に配達する制度があります。京都生協のメイト個配に近いものだと思います。ただ、それも担い手が少なく、大変な仕事です。

生協でも地域で困っておられる方を助ける事業をやっていけないか、という話にもなったのですが、限界があるようです。やはり、生協単独ではなく、行政をはじめ地域の多くの団体・組織と連携しないとだめだし、その努力も必要だという話になりま

した。

■ C グループ 濱田薫 (おおさかパルコープ理事)

まず、「家族でできることと、家族ではできないことがある」という話が出ました。自分の体験から、「家族だからこそ感情が入ってやりにくいけど、そこに第三者がかかわることで家族も楽になるし、その第三者にとっても仕事として成り立つ、そういう循環ができればいい」という話が出ました。

ある生協総代の意見は、「保育」という組合員活動があるが、高齢者を預かる「託老」のような活動が欲しいという声がありました。ほんの2～3時間の会議でも、家に要介護高齢者がいると家を空けられないとのこと。自分自身の時間を持つためにも、あるいは高齢者も外出してちょっとした時間を過ごせるという意味でも、そんなシステムがほしいという声でした。

そもそも、本当に困っている人が「助けてくれ」と発信できない状態を何とかしたいといけいのではないかと、という意見もありました。困っていることを人に知られてはいけい、頼れないという地域や風土もあるでしょうが、「助けてくれ」の声を発信できるように、キャッチできるようにしなければならないということです。

「かわりたくない」人へのアプローチとしては、単に訪問するだけでなく、専門性のある人がかかわることも大切で、生協なら専門職とつなぐこともできるのではないのでしょうか。

また、1時間のボランティアシステムがあっても、1時間も要らない作業で助けてほしいことも多々あります。30分200円など「ちょいボラの会」システムを有する生協もあります。一方、短時間の場合は要望された方の近所がかかわることになるた

め、近すぎて逆に利用しづらいという問題も出されました。知らない他人だったら助けてほしいけど、近い人には言いにくい。「地域の力」といえども、近すぎても困るんですね。

さらに、ボランティアをしている人は、「支援臭さ」というか、「助けてあげる」「何々してあげる」という上からの雰囲気があり、かえって「助けて」とは言いにくいという事例も出されました。

人手不足を克服するための男性の参加の話にもなりました。男性にいかにか活動にかかわってもらおうかという視点、会社の序列の兜を脱いで、地域の一員になってもらうことが、これからますます重要になってくると思います。

■ D グループ 吉川佐和子 (大阪いずみ市民生活協同組合理事)

「人に頼ってはいけい」「お世話になるのは申し訳ない」という高齢者は多く、困りごとを抱えこむという話題や、男性が地域に出てきてもらうには、役割や特技を生かすような場面づくりが必要だろうという意見がありました。

また、生協は週1回の配達や夕食宅配で家のドアを開けてもらえるという、大きな利点のある団体です。それを生かす方法も必要だという話がでました。たとえば、保健師や社協の職員と一緒にきてもらうなど、他の組織や専門家を交えた活動も可能ではないのでしょうか。「生協だから安心して頼める」という組合員がたくさんいます。組合員がいるということ自体が、地域の見守り・助け合いになればいいなと思います。

見守り協定について私が思うのは、協定をたくさん結び、協定に基づいた依頼はしますが、それを待っているだけになっていることが多いのではないかと、ということ

す。協定を結んだからには、年1回は交流を持つ場が必要です。そこで関係性を築き、新たに生まれるつながりをつくりたいと思います。

「話すことが苦手な人、人づきあいが苦手な人はどうしたらいいか」という話題では、話すことを無理に目的にしないで「子ども食堂」「シルバー食堂」に行き、「食事だけでもどうぞ」でもいいのではないのでしょうか。外に出る機会、誰かと顔を合わせる機会というか。そんなきっかけから、食材の提供や厨房の手伝いというような活動にも参加してもらえようになるかもしれません。

■ E グループ 飯田真奈美（コープあいち組合員理事）

社会的な活動をしていない方が70%近くいて、そういう方をどのように巻き込んでいくかというテーマで話が進みました。

女性は、ふらっと買い物したり散歩したりと目的なく外出できますが、男性はそれが難しいということで、こんな事例が紹介されました。

子どもの居場所として開放している書店の店番ボランティアの方が、どうしても用事ができてボランティアに行けなくなったことがあったそうです。とても困って、たまたま図書館で見かけた男性に「店番に行ってほしい」とお願いしたところ、快く引き受けてくれたとのこと。その後、毎週のように店番ボランティアをしてもらえるようになったということでした。

これは、その人が本当に困っていることが伝わったことも大きかったでしょうし、たまたま一本釣りでスカウトした人が来てくれるようになったという、特異な例かもしれませんが、社会的役割とはそういうことなのかなと思います。そうした場面を

キャッチできるよう、少し意識的になるということが大切だと思います。

やはり、人の役に立つのは誰でもうれしいことです。あとは伝え方や言葉の選び方、「捨てる」ではなく「人にあげる」というだけで行動が変わるということからも、うまく言葉を選んでひとりひとりに寄り添って、役割を持ってもらうことで地域社会に出ていきやすいのではないかという話で盛り上がりました。

■ 報告者よりコメント

【西山】 生協でできること、地域と協力してできることは、まだまだいろいろな可能性があると思います。こういう場をきっかけにそれぞれの単協に持ち帰って考えていただきたいというのがひとつです。もうひとつは、ぜひわが身の問題として、私自身がどうなっていくんだろうということを、考えていただきたいと思います。

【横尾】 心が折れそうな現場もいっぱいありますが、こういう場で志の高い方たちとお話ができて、勇気もらった気がします。自分たちですべてを解決しようとしがちですが、やはり地域包括支援センターなどにサポートを求めていく必要があります。個別にかかわりすぎると深く依存されたり、逆に恫喝されたりして困っているというメールもたくさん来ます。

肩肘張らずに普通にあいさつをして付き合い、何か困ったときには相談に乗れるような関係を、私たちは社会に出て普通に築いているはずですが、家に帰ると、地域に戻るとそういった横のつながりが希薄になっています。そこを肩肘張らずに支え合って行ければいいかと思います。

【川口】 生協は事業と運動で成り立っています。ですが、新たな試みを提起しても採算が合うか合わないかの議論に入ってしまう。そうすると従来のままの事業で運動は前に進みません。生協の事業だけではなく、時代に応じて事業と運動が支え合う、そんな存在の仕方を応援してもらえるような出資でコミュニティ再生に結びつけばいいと思います。売り上げ競争だけで勝負をするのではないのだと。

ですから、そのためにも、組合員どうしが「こんなことがある」「あんなことがある」から、「こうしたらどう?」「あんなこともできるかも…」と、気がついたことを出し合う機会を増やしていきましょう。「言わなくてもわかるよね」ではなくて、わかり切っていることでも何度も口に出してみる、そんなことから生協が地域で果たす役割、その現実的な形を少しずつ見出すことになるのではないのでしょうか。

■まとめー「物」よりケアに包まれて

暮らしのなかの「物」の在りようから、私たちは、あらためて「物」だけでは生きていけないことを実感しました。もちろん「物」も必要ですが、孤立死の現場を知れば知るほど、人と人とのつながりがどれほど大切なことかを思い知らされました。

また、超高齢社会においては、「たかがゴミ出し」が「されどゴミ出し」になるということ、「ゴミ出し」支援の必要性も深く学ぶこととなりました。

これまで多くの「物」を私たちの暮らしに届けてきた生協ですが、これからは人と人とのつながりを乗せ、暮らしの安全・安心を紡いでくれることを期待したいと思います。そうしたコミュニティ再生事業が、これからの生協のミッションになると考えています。